血液透析患者の通院を困難にする要因

栗林静香、高橋恵美子、後藤美樹
大曲厚生医療センター 人工透析室

The factor that makes the going to hospital of the hemodialysis patient difficult

Shizuka Kuribayashi, Emiko Takahashi, Miki Goto
Omagari Kousei Medical Center

＜緒言＞

日本透析医学会の慢性透析療法の現況によれば、2014年の75歳以上の透析を行っている後期高齢者は約３割を占めており、A病院においても後期高齢者は約３割と全国平均と同様である。髙橋[1)]は「透析患者が長年住み慣れた自宅から通院するためには、まずは家族の協力は必要不可欠といえる」と述べている。しかし、同居家族の高齢化や独居など家族形態の変化により通院手段の変更や、社会資源の利用が必要になる可能性がある。

A病院透析室においても、「送り迎えしてくれる人がいないから、透析後少し調子が悪いけど頑張って車で来ている」という患者の声が聞かれたが、通院状況について実態調査を行ったことはない。

そこで、現在の通院状況を調査し今後起こりうる通院を困難にする要因を明らかにすることで、支援体制構築の一助にしたいと考え、研究に取り組んだ。

＜研究目的＞

血液透析患者の通院を困難にする要因を明らかにする。

＜対象と方法＞

期間：平成28年５月～平成29年２月

対象：外来通院し血液透析を受けている患者で、本研究の趣旨に同意が得られた77名。

方法：

１．調査内容

１）対象者の属性

年齢、性別、透析歴、家族構成

２）地方独立行政法人岐阜県立下呂温泉病院の「透析のための通院に関する調査」を基に、独自の質問紙を作成し、以下の21項目を調査した。

①移動方法②通院手段（行き）、③通院手段（帰り）、④通院手段（夏期）、⑤通院手段（冬期）、⑥家

族が運転する車で誰に送迎してもらっているか⑦家族が生活の仕方を変更したか⑧通院には一人で来れるか⑨どうして付き添いが必要か⑩誰に付き添ってもらっているか⑪片道の通院所要時間⑫透析開始してから現在まで通院手段を変更したか⑬通院に関する問題や不安はあるか⑭通院に関する問題や不安の理由⑮協力・相談相手はいるか⑯相談相手は誰か⑰相談相手がいない理由⑱今後の通院手段の変更を考えているか⑲介護申請をしているか⑳介護度㉑利用しているサービスはあるか

２．調査方法

１）対象者へ研究の主旨と記入に要する時間が５分程度であることを説明し、質問紙を渡した。質問紙の回収をもって同意を得たこととした。

２）鍵付きの回収箱を患者待合室に設置し、後日回収した。

３）調査方法は無記名自記式質問紙による留置き調査法とした。

３．データの分析方法

対象の属性、質問紙の回答は単純集計を行った。

（倫理的配慮）

本研究で得られたデータは研究以外で使用せず、無記名調査と統計処理を行うことでプライバシーを厳守することを明記した。回収した調査用紙と入力データの漏洩には十分に注意し、鍵のついた場所へ保管、研究終了後は廃棄処分とした。本研究はＡ病院倫理委員会の承認を得たうえで実施した。

＜結果＞

対象者97名中、回答者数は77名で、回収率は82.8％であった。

１．対象者の属性

年齢は45～64歳までが28名（36.4%）、65～74歳までが26名（33.8%）、75歳以上が16名（20.8%）であった。性別は男性44名（57.1%）、女性33名（42.9%）であった。透析歴は０～４年が43名（55.8％）で、家族構成は拡大家族が47名（61.0%）であった（表１）。

表１　対象者の属性　n=77

		人数(%)
1.年齢	45歳未満	7(9.1)
	初老期(45歳～64歳)	28(36.4)
	前期高齢者(65歳～74歳)	26(33.8)
	後期高齢者(75歳以上)	16(20.8)
2.性	男	44(57.1)
	女	33(42.9)
3.透析歴	0～4年	43(55.8)
	5～9年	17(22.1)
	10～14年	10(13.0)
	15～19年	1(1.3)
	20～24年	5(6.5)
	25～29年	0(0)
	30年～	1(1.3)
4.家族構成	独居	9(11.7)
	配偶者と二人暮らし	14(18.2)
	その他と二人暮らし	7(9.1)
	拡大家族	47(61.0)

2．患者の移動方法について

一人で歩行できるが64名（83.1%）、杖歩行が６名（7.8%）、車椅子が７名（9.1%）であった（図１）。

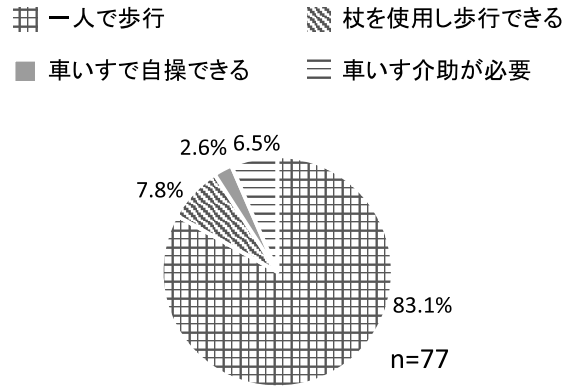

図１　患者の移動方法

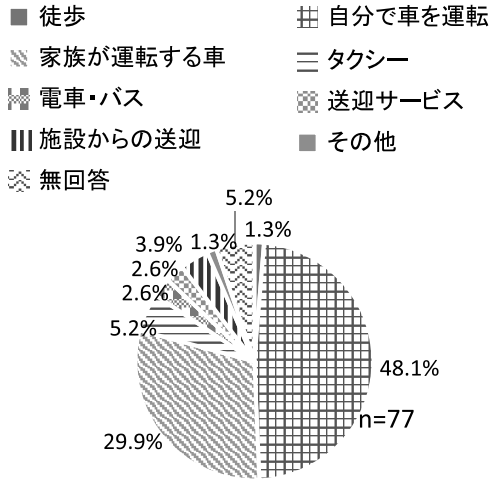

図２　通院手段　行き

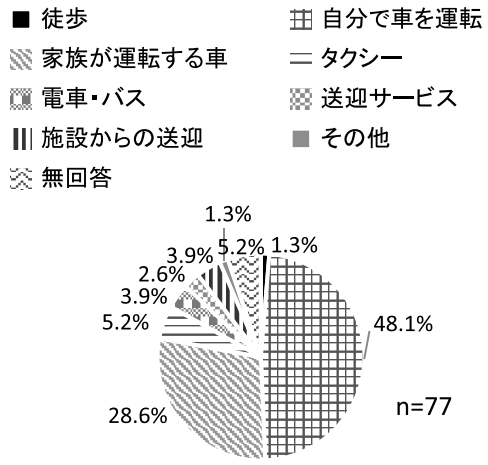

図３　通院手段　帰り

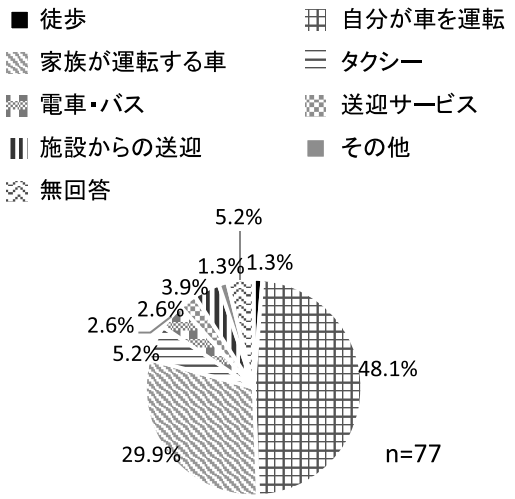

図４　通院手段　夏期

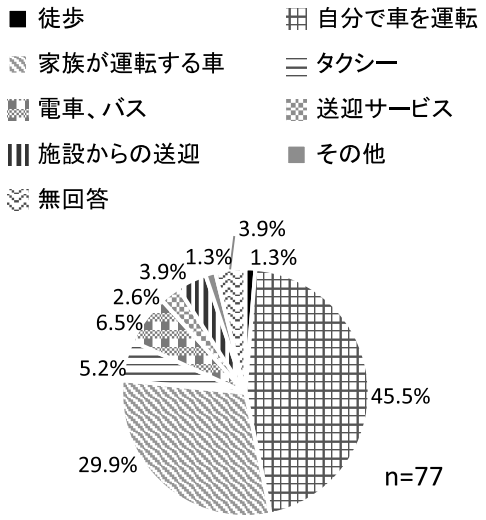

図５　通院手段　冬期

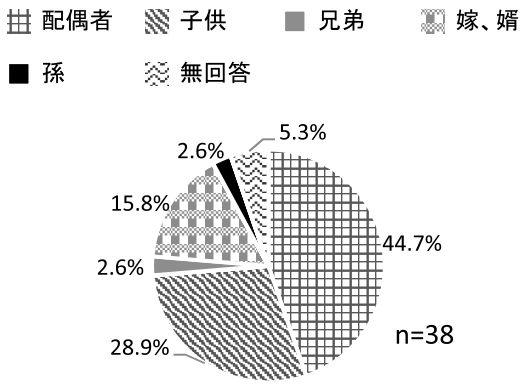

図６　家族が運転する車で誰に送迎してもらっているか

３．通院手段について

通院手段の行きでは徒歩が１名（1.3%）、自分で車を運転が37名（48.1%）、家族が車を運転が23名（29.9%）、タクシーが４名（5.2%）、電車・バスが２名（2.6%）、送迎サービスが２名（2.6%）、施設からの送迎が３名（3.9%）、その他が１名（1.3%）、無回答が４名（5.2%）であった（図２）。これらの数字は、通院手段の帰り（図３）、夏期（図４）および、冬期（図５）でも大差はなかった。

年齢別通院手段では自分で運転が45歳未満が5名（6.5%）、46～64歳が19名（24.7%）、65～74歳が９名（11.7%）、75歳以上が４名（5.2％）であった（表２）。送迎をするために、家族が生活の仕方を変えたことがあるか（複数回答）の問いに、「仕事の時間を変更した」が８名（12.1%）、「職場を変えた」が１名（1.5%）、「仕事をやめた」が３名（4.5%）、「食事の時間を変更した」が８名（12.1%）、「家事の分担を調整した」が４名（6.1%）、その他４名（6.1%）、無回答37名（56.1%）であった（図７）。

通院には一人で来られますかの問いに「一人で通院」が53名（68.8%）、「時々付き添いあり」が３名（3.9%）、「常時付き添いあり」が18名（23.4%）、無回答3名（3.9%）であった（図８）。通院所要時間は30分未満が61名（79.2%）、30分以上が14名（18.2%）であった（図11）。現在の通院の手段が出来なくなった場合、他の手段を考えているかの問いに（複数回答）「家族が運転する車」が21名（25.6%）、「タクシー」が10名（12.2%）、「電車・バス」が９名（11.0%）、「送迎サービスを利用」が６名（7.3%）、「施設入所」が４名（4.9%）、「何も考えていない」が21名（25.6%）であった（図18）。

４．家族の送迎について

「家族が運転する車」と答えた患者で、「誰に送迎してもらっているか」という問いでは配偶者が17名（44.7%）、子供11名（28.9%）、子の嫁、婿６名（15.8%）であった（図６）。「どうして付き添いが必要か」の問いに一人で歩けないが10名（34.4%）、高齢が９名（31.0%）、透析後具合が悪くなるかもしれないが６名（21.0%）、その他３名（10.3%）、無回答１名（3.4%）であった（図９）。「どなたに付き添ってもらっているか」の問いに（複数回答）配偶者が11名（36.7%）、配偶者以外の同居家族５名（16.7%）、同居していない家族４名（13.3%）、介護保険のヘルパー４名(13.3%)、入所施設の職員４名（13.3%）、無回答２名（6.7%）であった（図10）。

５．通院に関しての問題や不安について

通院開始後に通院方法を変更した患者が11名（14.3%）、変更していないが63名（81.8%）、無回答が３名（3.9%）であった（図12）。通院の手段に関しての問題や不安があると答えた26名（図13）のうち内容は（複数回答）「透析後の帰宅途中に体調が悪くなるかもしれない」が14名（30.4%）、「雪道運転」が11名（13.0%）であった（図14）。通院で困っていること、今後困ることや不安なことについて、「協力や相談できる相手はいるか」の問いに、はいが60名（77.9%）、いいえが９名（11.7%）、無回答が８名（10.4%）で（図15）、「相談の相手は誰か」の問いでは（複数回答）、配偶者37名（37.4%）、子どもが27名（27.3%）であった（図16）。相談相手がいない理由は身寄りがない１名（7.1%）、どこに相談すればいいか分からない６名（42.8%）、無回答７名（50.0%）であった（図17）。

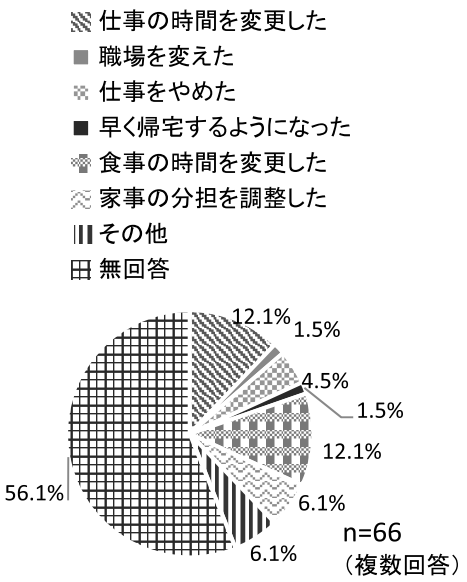

図７　家族が生活の仕方を変更したか

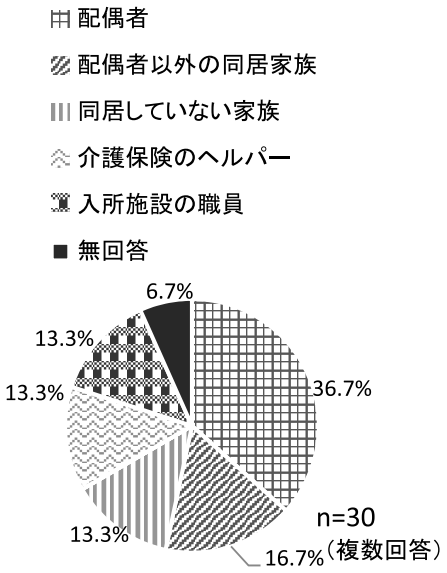

図10　誰に付き添ってもらっているか

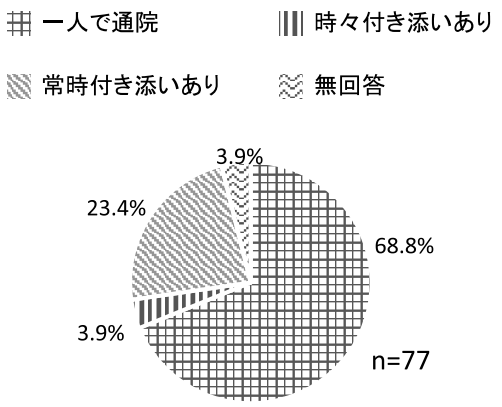

図８　病院には一人で来られるか

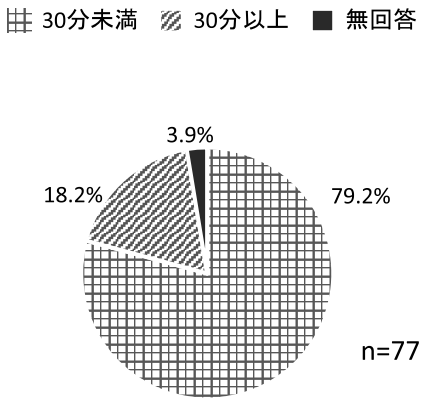

図11　片道の通院所要時間

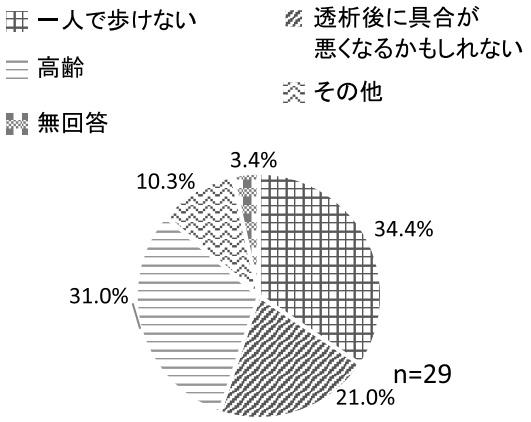

図９　どうして付き添いが必要か

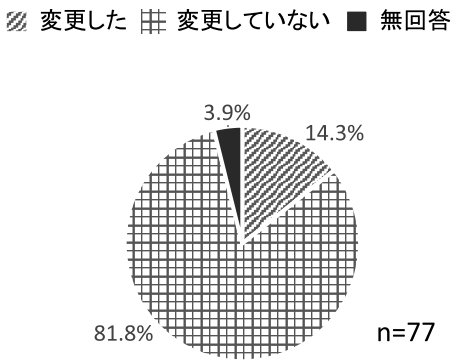

図12　透析開始してから現在まで
通院手段を変更したか

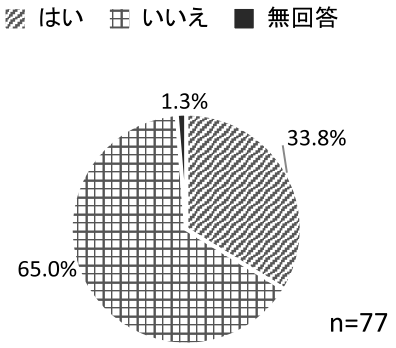

図13　現在の通院手段に関して
問題や不安はあるか

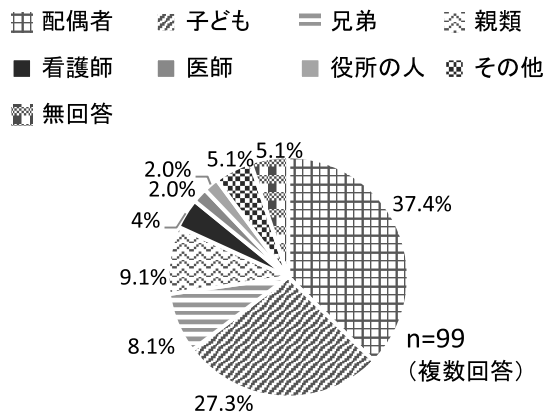

図16　相談の相手は誰か

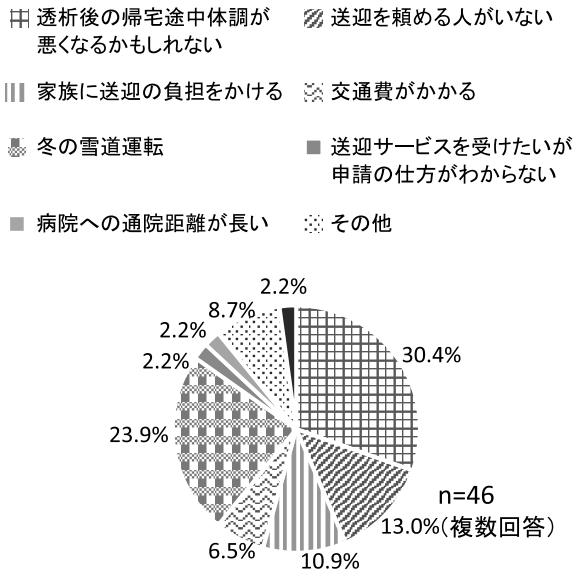

図14　通院に関しての問題や不安の理由

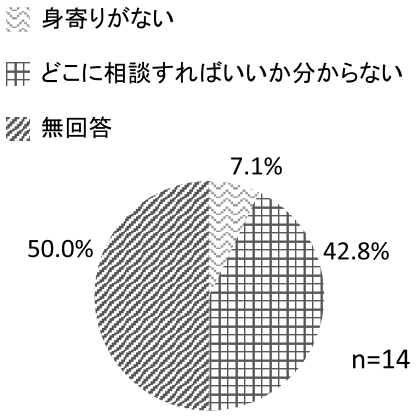

図17　相談相手がいない理由

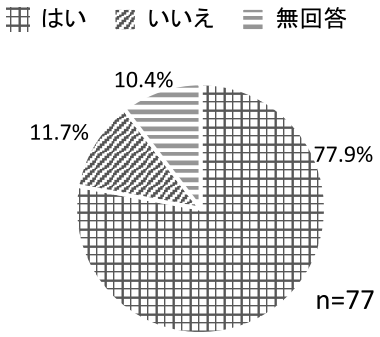

図15　協力や相談できる相手はいるか

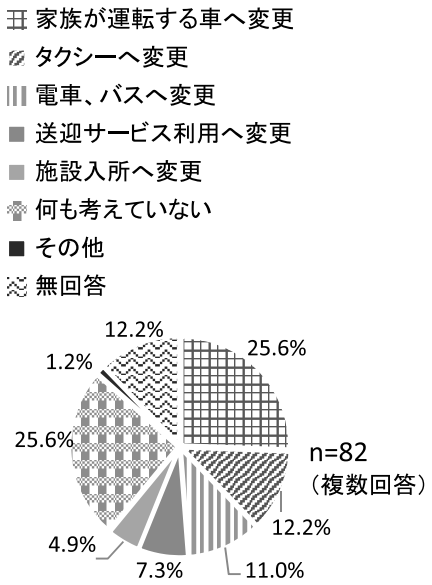

図18　今後通院手段の変更を
考えているか

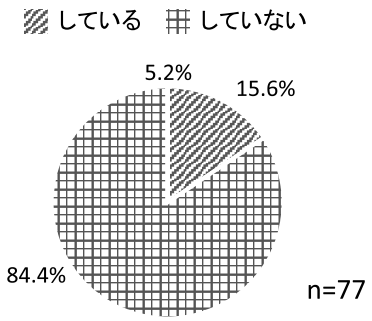

図19　介護申請しているか

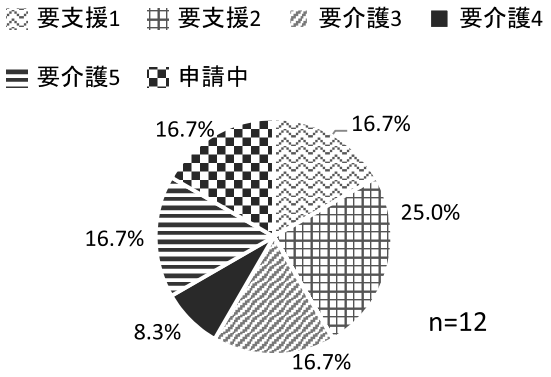

図20　介護度

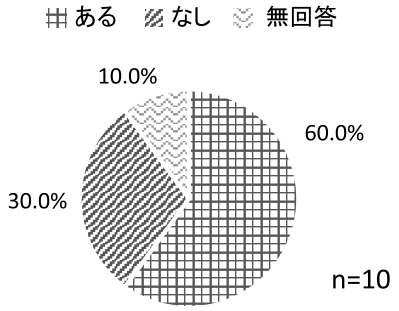

図21　利用しているサービスはあるか

表２　年齢別通院手段

n=77

	45歳未満 人数（%）	初老期 46～64歳 人数（%）	前期高齢者 65～74歳 人数（%）	後期高齢者 75歳以上 人数（%）	
徒歩	0	1(1.3)	0	0	1(1.3)
自分で運転	5(6.5)	19(24.7)	9(11.7)	4(5.2)	37(48.1)
家族が運転する車	2(2.6)	5(6.5)	9(11.7)	8(10.4)	24(31.2)
タクシー	0	0	3(3.9)	1(1.3)	4(5.2)
電車・バス	0	1(1.3)	2(2.6)	0	3(3.9)
送迎サービス	0	0	1(1.3)	0	1(1.3)
施設	0	0	0	3(3.9)	3(3.9)
その他	0	0	0	0	0(0)
無回答	0	2(2.6)	2(2.6)	0	4(5.2)
	7(9.1)	28(36.4)	26(33.8)	16(20.8)	77(100)

６．介護保険について

介護申請していない65名（84.4％）、申請している12名（15.6%）、要支援１は２名（16.7%）、要支援２は３名（25.0%）、要介護３は２名（16.7%）、要介護４は１名（8.3%）、要介護５は２名（16.7%）、申請中２名（16.7％）であった。利用しているサービスはあるかの問いにある６名（60.0%）、なし３名（30.0%）、無回答１名（10.0%）であり（図21）、利用サービス内容は予防訪問介護、ショートステイ、施設の送迎、デイサービス、リハビリ機能訓練型デイサービスなどであった（図19、20）。

＜考察＞

対象者のうち、自分で運転している患者は37名、48.1%であり、また、後期高齢者の４名5.2%が自分で運転し通院していた。警視庁交通総務課統計[2]によると、高齢運転者が関与する交通事故の割合は年々高くなり、平成27年は総件数の21.5%を占め、10年前の約1.9倍となっていると報告されている。加齢とともに感覚機能、身体機能は低下し、さらに透析患者では、健常者に比べ認知機能障害や身体機能障害の発症率が高いと言われていることから、安全な通院方法を患者と共に考えていかなくてはならない。

家族の付き添いが必要な理由は、「一人で歩けない」、「高齢であること」であった。さらに付き添いの家族は配偶者が多かった。患者の高齢化に伴い、同居家族の高齢化も同時進行し自宅からの通院も困難になることが予測される。また、今井[3]は「今後はさらなる高齢透析患者や糖尿病性腎症透析患者の増加、そのほか長期透析患者など合併症併発による要介護透析患者も増加するだろう」と述べている。家族の負担を軽減するために、身体能力、精神状態、家族背景を総合的にアセスメントし支援していくことが重要である。

先行研究において坂井ら[4]は、「透析患者層は高齢化していること、また透析治療年数も長くなってきていることを考えると、通院方法の変更は、今後、どの患者でも生じる可能性がある問題である」と述べている。今回の調査では、現在の通院の手段に関して問題や不安を抱えている事は明らかとならなかった。しかし、不安が明らかとならなかった理由として、患者自身が自分の将来について予測できずにいることが示唆される。年齢に関しては、初老期から前期後期高齢者が全体の91%を占めており、いずれ身体能力、家庭環境などの変化に伴い通院困難になることが予測される。これらのことから、将来的には通院手段に支障が出る恐れがあることを把握させ、介護サービスをただちに導入できるよう、介護保険申請や介護サービス導入などの支援体制構築が重要である。

＜結語＞

１．血液透析患者は前期後期高齢者が多かった。

２．介護保険申請や介護サービス導入などの支援体制が必要である。

＜文献＞

１）髙橋妙子：社会資源活用による患者支援の実際 自立支援アプローチ－その人らしく生きるための支援、臨床透析 Vol.32 NO.11：50－51、2016.

２）警視庁：交通総務課高齢者二輪車交通安全対策係 2016.12.22 高齢者が関与した交通事故発生状況、keishicho.metro.tokyo.jp/kotsu/jikoboshi/koreisha/koreijiko.html

３）今井眞里：社会資源活用による患者支援の実際 透析患者の家族支援－社会資源活用の視点から、臨床透析 Vol.32 NO.11：82－83、2016.

４）坂井千賀子、内垣戸葉子、今井靖子、他：透析患者の継続する定期的な通院の実態調査　下呂温泉病院年報 38：9－12、2015.

５）日本透析医学会統計調査委員会：我が国の慢性透析療法の現況：（2014年12月31日）2015.

６）NPO法人和歌山県腎友会：2014年和歌山県人工透析患者実態アンケートの「通院送迎について」
７）全国腎臓病協議会：2011年度血液透析患者実態調査報告書、2011.
８）仲村建吾、歌川孝子、岩尾秀海、他：通院困難な人工腎臓透析患者を巡る現状と課題（第１報）－上越保健所管内における実態調査と分析から－平成24年度福祉保健関係職員研修会研究抄録、http://www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Article/127/45/14,0.pdf（2014年６月18日).